時間停止能力者のためのリスクマネジメント入門

雛祭パペ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時間停止能力者のためのリスクマネジメント入門

【Ｎコード】
Ｎ４７１３Ｄ

【作者名】
雛祭パペ彦

【あらすじ】
その能力、過信していませんか？時間停止能力によって、あなたの人生には数々のリスクが発生します。豊富な実例を用いて具体的なリスクとそれを回避するための方策を学びましょう。Ｌｅｔ’ｓリスクマネジメント！！

超能力者といえども車に轢かれたら死ぬお（　＾ω＾）

今まさに、１人のおばあさんが、大きなトラックに轢かれそうになっている。
その大きなトラックの荷台には、砂利が山盛りに積載されていた。
すくなくとも、１０トン以上の重量がありそうなトラックだった。

おばあさんは、横断歩道を渡っている最中だった。
歩行者用信号は、赤色。
大きなトラックの前輪は、すでに横断歩道の白線にさしかかっていた。
つまりもうすぐ、おばあさんと大きなトラックは衝突する。

一般的に「おばあさん」というのは骨折しやすいイメージがあるし、実際そうに違いない。
だから、大きなトラックと衝突すれば「おばあさん」は骨折するだろう。

まず、おばあさんは左腕を骨折するだろう。
なぜなら、大きなトラックは、おばあさんから見て左手の方から走行してきたからだ。
次に、おばあさんは腰骨を骨折するだろうし、続けて左脚の大腿骨も骨折するだろう。
というか、女の老人であるところの「おばあさん」が、走行中の大きなトラックと衝突すれば、たぶん死ぬ。
このあと、おばあさんは死ぬのだ。
あの大きなトラックに轢かれて。

もうすぐ死ぬ。

でも、まだ「おばあさん」は死んでいない。
トラックと衝突していないからだ。

いつ衝突して、いつ死ぬのか。
まだ、死なない。

……ボクが時間を止めているかぎりは。

そうだ。いま、世界は停止している。
ボクが時間の流れを止めているのだ。

登校の最中に、この状況にバッタリ出会った。
赤信号なのにも関わらず、おばあさんが横断歩道を渡っていたのだ。
そこへ大きなトラックが差し掛かり……現在に至る。

まだ、おばあさんは死んでいない。
大きなトラックも停止している。
運転席を眺めれば、５０代くらいのオジサンが慌てた表情を浮かべていた。
ボクが時間の流れを止めている限り、おばあさんは死なない。

時間を止めるのは、簡単だった。
呼吸をしなければいい。
それだけのことで、世界は停止する。

ボクは、さきほどから呼吸をしていない。
もうすぐ１分くらいになる。
……そろそろ、限界だった。

おばあさんを救う方法が無いわけではない。
時間の流れを止めているあいだに、ボクが、おばあさんを移動させればいい。
おばあさんは小柄だったし、たぶん骨粗鬆症で骨がスカスカだろうから体重は軽いだろう。
だから、轢かれそうになっている「おばあさん」を安全な場所まで移動することは難しくない。
難しくないけれど、ボクにそれを実行する勇気は無かった。
なぜか？

怖いのだ。

もし、ボクがおばあさんに近寄った瞬間、ふたたび世界が動きだしたとしたら……。
おばあさんは死ぬだろうが、それは予定どおりの出来事だ。
しかし、そうなったら、ボクも巻き添えをくらって轢かれてしまう。
高校１年生の男子というのは骨折しにくいものだけど、走行中の大きなトラックに轢かれれば、おそらく骨折するだろう。
というか、死ぬ。

それは、イヤだ。

だから、ボクは「おばあさん」に近寄ることすらしたくない。
いくら時間の流れを止めることができるとはいえ、ボクは自分の能力を１００％知り尽くしているわけではないのだ。
止めているはずの時間の流れが、ボクの意思とは関係なく、ふたたび動きださないと言い切れないのだ。

もう限界だ。

胸が苦しくなってきた。
わずかな立ちくらみ。
お腹すいたでちゅ。

……。

来るべき瞬間、骨が折れる音は聞こえなかった。
急なブレーキングの悲鳴とエンジンの轟音が、それを掻き消したのだ。

ボクは生きている。

そして、いつものように学校へと向かった。

超能力者といえどもＤＳで遊びたいお（　＾ω＾）

おばあさんが轢かれる瞬間は、なるべく見ないようにした。
でも、直接見ていないからといって平気かといえば、そう単純なものではない。
おそらく走行中の大型トラックに衝突された《おばあさん》は、あたかも現役サッカー選手に蹴飛ばされたサッカーボールのように――

「では、はじめます。教科書や辞書は片付けるように」

そう言って、男の先生は、携えていた茶封筒の中から英語のテスト用紙の束を取り出した。
中間テストの１限目。

「ニンテンドーＤＳもダメだ。すぐに片付けなさい」

注意されたのは、ボクだった。
テスト直前の最後のあがきで『英語が苦手な大人のＤＳトレーニング　もっとえいご漬け』をプレイしていたからだ。

「先生。これはＤＳじゃなくてＤＳ　Ｌｉｔｅです」

そうやって反論しつつ、ボクはＤＳ　Ｌｉｔｅの画面から視線をそらさない。
ギリギリまで英単語を覚えたいからだ。

「そんな事は知っている。言っておくが、オレはＤＳ　Ｌｉｔｅを赤・白・銀と３台持ってる。なめんなよ」

男の先生――村咲先生が任天堂の信者（いわゆる妊娠）であることは、うちの高校では有名な話だった。
その信者ぶりは徹底していて、村咲先生は、生まれてから1度も他社のゲームをプレイしたことがないらしい。
つまり、プレステやセガサターンをやったことがないのだ。

「おみそれしました。でも、ファイナルファンタジー7はプレイした方がいいと思いますよ。プレステ買わないとダメですけど」

「ふん。ＦＦ7だって8だって、いつかＤＳに移植されるだろうから、べつにプレステを買う必要などない……っていうか、はやく英語のテストを始めるぞ！」

開始のチャイムも鳴ったので、あきらめたボクはＤＳ　Ｌｉｔｅを机の中にしまった。
ちなみに、ノーブルピンクオシャレ魔女バージョンだ。
ボクのＤＳ　Ｌｉｔｅの色は。

超能力者といえども「死ね」とかは傷つくお（　＾ω＾）

中間テスト・1限目。英語。

各自に配られた用紙は2枚。

問題用紙と解答用紙だ。

村咲先生の「はじめ」の声で、皆がいっせいに試験に取り掛かる。

ボクは、とりあえず氏名を記入することにした。

はじめ「朝青龍」と書いてみた。

しっくりこない。

やっぱり「朝青龍」は消して「チャールズ皇太子」と書いてみる

……すぐに馬鹿らしくなって本名を書き直した。

英語テストの1問目を読む。

「えっと、次の英単語の意味を――」

「おい。テスト中は静かにしてくれ」

「あ、すみません。つい、声をだして問題を読みあげてしまいました」

ボクの癖だった。マンガを読むときでも、たまに声が出てしまうのだ。

ところで、テストの1問目なのだが、設問の文章のなかにボクが

読めない漢字が含まれていた。
仕方がないので、２問目から先にやることにする。
……。
漢字は読めた。でも、解けなかった。
仕方がないので、２問目は飛ばして３問目から解くことにする。
「……先生、難しすぎて１問たりともボクには解けません」
「ならば死んでしまえ」
学校教師に、はっきりと「死ね」と言われてしまった。
「じゃあ先生。どうやったら楽に死ねるんでしょうか？」
「だまれ。しゃべるな。息を止めてろ」
村咲先生の言うとおりだ。
いまは英語のテスト中なのだ。
とはいうものの、このままではボクは０点だ。
０点は困る。とても困る。
ならば、どうするか？
――アレを使うしかない。

超能力者といえども裸踊りは勘弁してお（　＾ω＾）

英語のテスト開始から４０分以上が経った。
１５問あるうちの２・３問は解けた。でも、正解かどうかはわからない。
もうそろそろ、１限目終了のチャイムが鳴る頃だ。

ボクは――息を止める。

黒板の斜め上にある壁時計が針の音をたてるのをやめた。
さっきまでうるさかった「カタカタ」というシャープペンシルの音も聞こえなくなった。

世界が停止したのだ。

さて、どうしようか。ボクは、キョロキョロと周りを見渡し、たしかに時間が停止していることを確かめた。
やることは決まっている。もうすぐ１限目が終わるということは、ボク以外のほとんどの人間が、英語テストの全１５問を解答し終えているということだ。
そして今、ボク以外の人間は動けない。おそらく「停止」しているという実感すら無いだろう。

つまりは「みんなのテストの答えを見放題」というわけだ。
いわゆる、カンニングだ。竹山だ。

息を止めてから、すでに３０秒が経過していた。
すこし苦しくなってきたので、とりあえず呼吸をする。

ふたたび時間が流れはじめる。
秒針やシャープペンシルの音が、いっせいに湧き起こる。
でもまた止める。
このまま自分のシャープペンと解答用紙を持って、うちのクラスで1番成績が良い「山川可南子」（やまかわ・かなこ）の席に移動すればいい。
そして全てを丸写ししたあと、3問か4問ほどを違う答えに書き直せばいいのだ。まったく同じ解答用紙では、カンニングがバレてしまう。
でも、ボクは実行できずにいる。
思いきって席を立てないでいる。
それは、なぜか？
うちの高校では、テスト中のカンニングが禁止されているからだ。
というか、カンニングを禁止していない学校などあるはずがない。
もしカンニングが発覚した場合、その生徒は――全校生徒の前で「一発ギャグ」を披露しなければならないと校則で定められていた。
「カンニングを行ったものは、即退学処分とする。ただし、カンニング者は、学校長を筆頭とした全教員および全校生徒の対面において、オリジナリティかつ爆笑誘発性を備えた一発ギャグをおこなう事により、その行為はただちに免責される」
追記として、
「ただし、一発ギャグの披露によって笑いを誘発された者の頭数が、

全教員および全校生徒の7割以上に達しなかった場合は即退学処分とし、その日のうちに北朝鮮へ強制転校処分とする」

と定められているのだ……なんという厳しい校則なのだろう。

以前、ボクは見たことがある。

あれは確か3年生の女の先輩だったと思う。

大学推薦にかかわる重要なテスト中にカンニングをしていて、それを教師に見つかった。

あれは見ていて思わず同情したくなるような、屈辱的な見世物イベントだった。

その女の先輩にも名誉というものがあるので詳しくは書けないが、数百人の生徒が見守るなか、彼女は壇上に登場するやいなや身に着けていた服を脱ぎはじめ、突然あんな事やこんな事を……これ以上は話せない。

ボクは怖かった。

確かに今、時間は止まっている。ボク以外の人間は、身体が動かないどころか、なにかを考えることすら出来ない状態だ。

だからクラスの優等生・山川可南子の解答用紙を丸写しすることなど簡単なことだ。

でも、ボクにはできなかった。

もし万が一、カンニングしている最中に何かの間違いで時間が流れ始めたとしたら……ボクのカンニング行為はバレてしまう。すなわち一発ギャグだ。

――そうなったとしても、バレる前にまた時間を止めればいいじゃないか。

と、普通は考えるだろう。ごもっとも。
でも、そんな緊急事態において、ふたたびボクの意思によって時間停止が行える保証などどこにもないのだ。今朝の交通事故の時におばあさんを助けようとしなかったのも、そういう事情による。

つまり、こういうことだ。
ボクは、ボクの時間停止能力を信頼していない。

ボクは、自分の超能力を全く信用していない超能力者なのだ。

超能力者といえども不意打ちには弱いお（　＾ω＾）

というわけで、英語のテストは結局ほとんど解けなかった。
すこし記入したから０点ということはないだろう。
たぶん、８点か９点くらいはもらえるはずだ。

「おい、ピョロ助！」

１０分の休み時間をはさんで、次は歴史のテストだ。

「ピョロ助、てめえ聞こえてんだろ！　返事しろよ！」

誰かが怒鳴っている声が聞こえたが、ボクは「学研　要点ランク順シリーズ　日本の歴史ＤＳ』をプレイして、次のテストに備える。

「えっと……１１９２つくろう共産党、７９４ウグイス食べたいな」

「てめえ、無視してんじゃねえよ！」

ドスッ、っという音が聞こえた。
それと同時に、ボクはニンテンドーＤＳＬｉｔｅを床に落としてしまった。誰かに頭を殴られた衝撃のせいだった。

「な、なんだよう。ひどいじゃないか！」

「さっきから呼んでるのに、返事をしないオマエが悪い」

うしろを振り返ると、そこには山川可南子（やまかわ・かなこ）が立っていた。
しかも、その手には消火器を持っている。

「も、もしかして――それで殴ったの！？」

「うん。殴ったよ」

ボクは、山川可南子に消火器でブン殴られたらしい……えっ！？

「ねえ、お礼は？」

「おれい？」

山川可南子の発した言葉の意味がイマイチ理解できなかったボクは、思わず聞き返してしまった。

「このたびは殴っていただき本当にありがとうございます、でしょ？」

暴虐の化身こと山川可南子は、そう言いながら床に落ちていたボクのＤＳＬｉｔｅを真上から踏み潰す。

「あっ、この女、笑ってるよ！」

スカートをはいた魔王、つまり山川可南子は「アヒャヒャヒャ！」と愉快そうな声をあげながら、ボクのニンテンドーＤＳＬｉｔｅ（ノーブルピンクオシャレ魔女バージョン）を完全に破壊してしまった。

超能力者といえどもパシリはイヤだお（　＾ω＾）

「森永ピクニックが飲みたい。ヨーグルト味」

歴史のテストをひかえた休み時間に、山川可南子に命じられた。女の魔王は、確かに実在するのだ。

ちなみに《森永ピクニック》というのは、紙パック入り乳飲料のことだ。うちの学校の自販機コーナーで売っている。

「じゃあ、次の歴史のテストが終わってから買いに……」

「いますぐ飲みたい！　１０秒以内に飲みたい！」

そう駄々をこねるようにして、山川可南子はその場で足を踏み鳴らした。ますます、ボクのＤＳＬｉｔｅが粉々になる。

「わ、わかったよ！　すぐに森永ピクニックを買ってくるから、もう壊すのやめてよ…」

すでにＤＳＬｉｔｅは修理不可能な形状になっていた。

ボクは、あわてて息を止める。

教室内の喧騒がパッタリと消えた。

当の山川可南子も、ボクのことをにらみつけたまま停止している。腹いせに、胸のあたりをツンツンしてやろうかと……そんなこと恐ろしくて出来るはずないじゃないか！　こらーっ！

森永ピクニックが売っている自販機コーナーは、1階正面玄関のそばにある。

ここは3階なので、女の魔王が命じた「１０秒以内」に買ってくるのは難しい――普通の人間ならば。

ボクは教室を飛び出す。そして階段に向かって早歩きをする。なぜ走らないかといえば、すぐ息切れしてしまうからだ。今回のミッションでは、なるべく長く時間を停めておきたかった。

3階から2階へ――そして1階まで一気に降りる。ここまでで、4回の息継ぎを要した。息継ぎ1回につき1秒だとすれば、片道に費やした時間は4秒。往復なら8秒。つまり2秒の余裕があるということだ。

幸いなことに、自販機コーナーには誰もいなかった。ボクは森永の自動販売機にたどりつくと、すぐさまズボンのポケットから財布を出して中身を確かめる――そして、１００円玉をコイン投入口に入れた。森永ピクニックは９０円なので、それで足りるはずだ。

「……」

不思議なことに、ヨーグルト味のボタンは点灯しなかった。ボクは《売り切れ》なのかと思ったが、そういうわけでもなさそうだった。

「な、なんでだよう！　なんでだよう！」

その答えは、森永の自販機に貼られている1枚の紙に書いてあっ

た。

「近年における原油価格の高騰により、森永ピクニックは値上げしました。ご了承ください」

たしかに値上げされていた。

ヨーグルト味の新価格は「９０００円」になっていた。

超能力者といえども鼻水が止まらないお（　＾ω＾）

森永ピクニック（ヨーグルト味）を買えないまま、ボクは教室へ帰ってきた。
そもそも９０００円なんて大金を持っていなかったのだ。

「……ええと。売り切れだったよ、森永ピクニック」

とりあえず、嘘をつくことにした。
９０００円に値上げされていたなんて言っても、どうせ信じてもらえない。

「ん？　９０００円って何のこと？」

山川可南子は、金属バットで素振りをしていた。
ひと振りするたびに、死を予感させる風切り音が、周りに響きわたる。

「えっ！？」

ボクは驚きのあまり鼻水を吹き出す

「いま心の中で言ってたでしょ――９０００円に値上げがどうのこうのって？」

「い、言ってないよ。なんにも言ってないよ！」

「ウソついても無駄よ。わたし、テレパスなんだから」

そう言い終えると、山川可南子は金属バットをボクの机やイスに向かって振り降ろした。
けたたましい音をたててイスは壊れ、机の天板に亀裂がはしる。
もう意味がわからない。
「え？　テレパスって、あのう…筋肉痛の時とかに貼るアレのこと？」
「――それをいうならサロンパスだろ。テレパスというのは、要するに、人の心を読みとれる特殊能力のことだ。ちなみ、もう休み時間は終わっている」
とつぜん聞こえてきた声のほうに振り返ると、大きな事務用封筒を抱えた男の先生が立っていた。
そうだった忘れていた。
いまは休み時間で、これから歴史のテストが行われるのだ。
そして、ボクは心の準備すらできずに、テストを受けるハメに陥った。
「味噌汁で足を洗ってヘソで茶を沸かしながら、おととい来やがれ！」
わけのわからない捨てゼリフを残して、山川可南子は自分の席に戻っていく。
というか、ボクの机には亀裂が入っていて、イスに至っては破壊されていた。
これではテストを受けられない。
「あの、先生……イスと机を替えて欲しいんですけど」

「ダメだ。めんどくさい」

「えっ！？」

またもや、鼻水が吹き出る。

「っていうか、オマエはどうせ赤点なんだから、テスト受けなくていいよ」

「そ、そんな勝手に決めつけないでくださいよ！　きのう徹夜してＤＳのソフトで勉強を――」

「――だまれ。オレがあとで適当な解答を記入しておいてやるから、床に正座して５０分間おとなしく待ってろ…では、はじめ！」

こうして、ボクの意見は却下されまくり、歴史のテストが始まった。

超能力者といえども足はしびれるお（　＾ω＾）

歴史のテストが始まって、およそ１０分が経過した。
ボクは、先生の命令によって床の上で正座をさせられていた。
なぜ、自分ひとりだけがこのような扱いを受けなければならないのか釈然としない気分のまま、ボクは自問自答を繰り返していた。

テスト中なのにテストを受けられないとは、これいかに。
ボクは退屈だった。

「あのう、先生――暇なので、ＭＰ３プレーヤーで音楽を聴いてもいいですか？」

「いいはずあるか！　テスト中なんだから静かにしろ！」

怒られてしまった。
仕方がないので、退屈しのぎに《山川可南子》について考えることにする。

実をいうと、彼女は転校生なのだ。
前に通っていた高校は、全国的に有名な名門女子校だった。
いまでも山川可南子は、そこの制服を着て登校している。白いリボンをあしらった紺色のセーラー服で、スカートの裾は膝下１５センチくらいの位置にある《清楚さ》を強調するデザインの制服だった。

――テスト終了時間まで、まだ３０分以上もある。もう少し続けよう。

山川可南子の容貌を言い表わすならば「お嬢さま」の一語に尽きる。
立ったり座ったり歩いたりする動作がいちいち大人びていて、思わず見とれてしまうほど美しかった。
それならば容姿も美しいかと思いきや、天は二物(にぶつ)を与えずとはよく言ったもので、

「先生！　ピョロ助が、カンニングしてます！」

とつぜん大きな声が聞こえたかと思えば、それは山川可南子の声だった。
どうやら《ピョロ助》というクラスメイトのカンニングを発見したらしい…ていうか《ピョロ助》なんて名前の奴、うちのクラスにいただろうか？

超能力者といえどもタモリと握手したいお（　＾ω＾）

歴史テストの最中に、カンニング事件が起こった。
発見したのは、クラス委員長の山川可南子だ。

「わたし見ました…ピョロ助が、神宮寺（ジングウジ）くんの答案用紙をチラチラと盗み見ていたんです！」

ちなみに神宮寺くんの席は、ボクの右隣だった。
気の毒なことに、神宮寺くんは困惑の表情を浮かべていた。

「あー、ピョロ助ならやりかねないよなー（笑）」

「そうそう。いつかはこうなると思ってたのよね～（笑）」

「だって、ピョロ助ってチョー頭悪いもんね～（笑）」

さんざんな言われようだけど、そもそも「ピョロ助」とは誰のことなのだろう。とても日本人の名前だとは思えない響きなのでニックネームなのかもしれない。

「おーい！　他のクラスもテスト中なんだから静かにしろ～」

面倒くさそうに立ち上がりながら、先生は教室内を鎮めようとしていた。
ピョロ助という迷惑な野郎のせいで、クラス内が混乱している。
ボクはよく知らないけれど、きっとロクでもない奴なのだろう。カンニングをするなんて「恥を知れ」と思った。

「先生！　ピョロ助が、カンニングを他人事のように考えてます！」
さすが山川可南子だ。テレパス――つまり他人の考えを知ることができる能力を使って、さらにピョロ助という男子生徒を追い詰めようというわけだ。
ホント、タチが悪いったらありゃしない。
「なんだと、ピョロ助！　てめぇ、もいっぺん言ってみろよ！！」
山川可南子が、とつぜん大声で怒りはじめた。
正義感が強いのにも限度というものがある。まるで、ヤクザだ。
「お、落ち着け、山川。とにかく、皆はテストを続けるように…ピョロ助は、オレと一緒に職員室まで来い！」
そう言って先生は――ボクの右耳を、ひねりあげた。
「痛ッ！…イタタタタ、せ、先生！？　いきなり何をするんですか！」
まるで、カツオ（磯野サザエの弟）になったような気分だった。
「往生際が悪いぞ！　このカンニング野郎が！！」
「え！？　カ、カンニング？」
「ほら、さっさと歩け！　この犯罪者め！！」
そう怒鳴られながら、ボクは先生にお尻を蹴られた。

「カ、カンニングをしたのはピョロ助って奴でしょ！？　なんでボクが――そ、そうだ！」

なにが起こったかサッパリわからないボクは、カンニングの被害者である神宮寺くんに助けを求める。

「じ、神宮寺くん！　違うよね？　カンニングしたのボクじゃないよね？」

以前、神宮寺くんには消しゴムを貸してあげた事がある。だから、きっと――

「黙れよ！このクズ野郎！！」

エェェ（´д`）ェェェ

超能力者といえども腕時計は１００円のだお（　＾ω＾）

普段は温厚なはずの神宮寺くんにまでツバを吐きかけられて、ようやくボクは理解した。
どうやら「ピョロ助」というのは、ボクにつけられたアダ名らしい。

「ようやく気が付いたか、カンニング野郎！」

勝手にボクの心をトレースして、山川可南子は得意げな表情を浮かべていた。
それにしても、なぜにピョロ助なのだろう？
どうせなら「コロ助」がよかった。
コロちゃんなどと呼ばれたい。
我輩はコロッケが大好物ナリヨ～。

「黙れよ、ピョロ助！　本物のコロちゃんは、もっとカワイイんだよ！　あやまれ！藤子・Ｆ・不二雄に謝れ！」

さっき山川可南子は「黙れ」と言ったが、ボクはひとことも声を発していなかった。
なんかもう面倒くさくなって、ボクは息を止めることにする――
瞬時にして、世界のあらゆる生命が仮死状態を迎えた。

「バカ！」
「アホ！」
「ブス！」
「カス！」
「ハゲ！」

「性悪！」
「水虫！」

例によって、小心なボクに出来る仕返しといえば、こうやって時間停止に乗じて悪口を言うことくらいだった。

情けないことに、ボクはこういう形でしか鬱憤を晴らせない人間なのだ。

ええ、最低ですとも…そうですよー男のクズですよー。あはははは…は…は。

（；つД｡）；　ウワーン

まあ自虐するのはこれくらいにしておくとして、事態は深刻だった。このままいけば、ボクは校長先生を含めた全ての教師および全校生徒の前で、斬新かつエンターテインメントに優れた《1発ギャグ》を披露しなければならない。

言っておくが、決してボクは《カンニング》などしていない…というか、テスト用紙も与えられずに床の上で正座していたのだから《カンニング》などする必要がなかったのだ。

しかし《真実》とは、往々にして歪められるものだ。

恐るべき悪意を内に秘めたクラス委員長――すなわち山川可南子の謀略により、ボクには退学の危機が迫っていた。

超能力者といえども台所用洗剤は飲めないお（　＾ω＾）

「せ、先生…ボクはカンニングなんかしてません！」

「ウソつけ！　山川が目撃したって言ってるじゃないか。クラス委員長がウソつくはずないだろ！」

この男性教師は、山川可南子のウソ証言を完全に信用しているようだった。

「その通りです、先生。わたし、はっきりと見ちゃったんです…ピョロ助が変態的な目つきで神宮寺くんの答案用紙をのぞいていたんです。たぶん同性愛者です」

山川可南子は、まさに《立て板に水》といった感じでボクに新たな疑惑を追加する。

「ちがうよ！ホモじゃないよ！」

「黙れよ、ホモ助！」

あのう、そのニックネームは勘弁してもらえないでしょうか……。

「信じてください先生！ホモじゃないんです！ボクは女の子が好きなんです！１０才くらいの女の子が好きなんです！！」

「……うわっ、ロリコンだ！」

「やっぱりね。なんかそんな気がしてたのよね……」

「どのみち退学にしたほうがいいのは間違いないよな」
「っていうか、日本国から出ていけよ！」
「地球からもな」
「むしろ、火星にでも転校させればいいんじゃね？」
あれ？ボクに人権はないのかな？　さんざんな言われようだった。
「――ふむ。そうだったのか」
突然、ボクの右耳から痛みが消える。
テスト監督の先生が、ひねり上げる手を離してくれたのだ。
「悪かったな、ピョロ助…先生、おまえのこと誤解してたみたいだ」
男性教師は、あわれみの表情を浮かべながら、ボクに微笑みかけてくれた。
「せ、先生…よ、ようやくわかっていただけましたか？」
どうやら日本の教育も捨てたものではないようだ。
悪魔の謀略に惑わされずに正しい判断を下すことのできる教師が、今まさにボクの目の前にいた。
「ああ、よくわかったよ…おまえはカンニングなどしていない」
「信じていただけるんですね、先生！」

神はボクを見捨てなかったのだ。

「もちろん信じるとも――ロリコンに悪事をはたらく奴などいない！これは断言できる！！」

「え！？」

思いもかけない先生の言葉に、ボクは絶句する。

「まあ聞いてくれ、ピョロ助よ。実をいうと、オレも小学生の女の子が好きでなあ～……とくに5年生くらいの子がたまらなく――」

「――いいかげんにしてください、先生！　ピョロ助くんはカンニングなんてしてません！」

ロリ教師の戯言をさえぎるようにして、ひとりの女子生徒の声が教室中に響き渡る。

それは、突然の出来事だった。

超能力者といえども和田アキ子は怖いお（　＾ω＾）

母さん…こんな世界にも、神様っているんだね。

クラスメイトの１人から発せられた、ボクを擁護する声。
その女子生徒は、ボクにとって《女神》であり《天使》だった。
まさにベルダンディーであり、ドクロちゃんなのだ。

「断言できます！　ピョロ助くんは、けっして神宮寺くんの答案用紙なんて見てません！」

ボクの味方――泥水アリスは、イスから立ち上がり、ロリ教師とクラス全員に向かって言った。
その姿は堂々たるもの…とは言えず、遠くからでも両足や手がガクガクと震えているのが見えた。ありえないくらい顔も紅潮している。完熟トマトみたいだった。

「ど、泥水さん……」

ボクは目頭を熱くしながら、泥水アリスを見つめた。
すると、彼女はボクと視線を合わせるや否や、すぐに逸らした。
でもそれは拒絶された感じのしない、なにか胸がこそばゆくなるものだった。

「そうか。泥水もピョロ助はカンニングをしていないと思うか――うむ、先生もそれには同感だ。そうだよな！ロリコンに悪い奴なんていないよな！」

１００万回ツッコミを入れても足りないくらいの理由だが、ボク

にとっては好都合だった。

「――ちょっと待ってください、先生！　じゃあ、わたしが嘘をついたっていうんですか？」

世紀の小悪党こと山川可南子の声には、焦りが含まれていた。

へへへ。ばーか、ばーか。

「そ、そうよ！　山川さん…あなたは嘘つきよ！」

すこし口ごもりながらも、泥水アリスは毅然たる態度で《嘘吐きテレパス》を断罪してみせる。

「くっ……」

えへへ、困ってるの？　ねえ困ってるの？　これ聞こえてるよね山川可南子ちゃん？　でもさ～はっきり言って自業自得なんだよね～ニャーおかしい。

「てめぇおぃこらピョロ助！調子にのってんじゃねえぞ！！」

「山川、なんだその口のきき方は！　それに今はテスト中だ。大声を張りあげるのは慎みなさい。他のクラスに迷惑だぞ！」

カンニング疑惑をかけられたボクと山川可南子。

両者の立場は、どうやら逆転しつつあるようだ。

超能力者といえどもモテモテは嬉しいお（　＾ω＾）

カンニング疑惑をかけられたボクを擁護してくれた女子生徒――泥水アリス。

彼女は、とても背が低かった。

その身長は１３０センチくらいしかなく「わたち、小学生でちゅ」と名乗っても通用する外見の持ち主だった。

「な、なによ！　ピョロ助がカンニングしたのは間違いないんだからね！」

山川可南子が顔を真っ赤にしながら、なおもボクに罪を着せようとする。

「ピョロ助くんは、カンニングなんて絶対にしてません……わたし、ずっと見てたんです！」

おぉぉぉ！という歓声がクラス中に響く。これって愛の告白？

「わ、わたしだって、ずっとピョロ助のこと見てたわよ！　一緒のクラスになった時から1日も欠かさずに――」

再び、多くのクラスメイトたちから驚きの声があがる。

いつもは傲慢なはずの山川可南子が、伏し目がちにボクへの「一途な想い」を告白したのだから、皆が驚くのも無理はなかった。

「くそっ、ピョロ助のくせに！」

「アリスちゃんはオレが狙ってたのに！」

「俺なんて可南子ちゃんに告白して、３回もフラれてるんだぞ！」

「もうカンニングしたって事にしちゃうか、こうなったら」
「おい誰か、窓開けろ！いますぐピョロ助を突き落とすぞ！」

クラス男子たちの怨嗟の声と共に、ボクの方に向かって色々な物体が飛んでくる。
消しゴム、丸めた問題用紙、シャープペン、教科書、カラのペットボトル、ウ●コなどを投げつけられながら、ボクはクラスの男子全員から、とてつもない殺気を浴びせられ続けていた。

「や、やめてよう！？　痛っ、痛いよう！」

男子たちの嫉妬に狂った行動から逃れるため、とっさにボクは息を止める――ただちに時の流れが滞り、様々な物体が空中で静止した。

とりあえず安全を確保するため、ボクは自分の席を離れることにした。

超能力者といえどもガンダムに乗りたいお（　＾ω＾）

さて、どうしようか。
文房具の集中砲火を避けるために、あわててボクは自分の席を離れる。
時間が停止しているので、テスト中に立ち歩いても先生に怒られることはない。

1度に2人の女の子から、愛の告白をされてしまった。

山川可南子と泥水アリス。
どちらも現役の女子高生であり、ボクのクラスメイトだ。
一生に一度、あるかないかの出来事だと自分でも思う。

驚いたのは、山川可南子がずっとボクを好きだったらしいという事。
じゃあなんで、あんなイヤガラセ行為を仕掛けてきたのか…どうも、よくわからない。精神障害者だろうか？　だったら男女交際なんてお断りだ。

どうせ付き合うのなら、ボクは泥水アリスの方がよかった。
だって身長が１３０センチくらいしかない――つまりロリッ子であり、そのうえ泥水アリスは三つ編みがよく似合う童顔の少女だった。
ボクは外見がロリでありさえすれば、容姿なんてどうでも良いと思っている。っていうか、身長が低くて童顔って以外にどんな基準があるというのか。ボクにはさっぱり理解できなかった。

ところで、山川可南子と泥水アリスには、ある共通点があった。

それは、2人とも我が校の制服を着ていないということだ。
それぞれ事情があって、女魔王は《前に通っていた高校の制服》を着ていて、ロリ水…じゃなくって、泥水アリスは《中学時代の制服》を着ていた。

転校生であるところの山川可南子は、紺色のセーラー服を着ている。
でも、うちの高校は男女ともにブレザー制服だった。
転校してきてから数ヶ月以上も経っているはずなのに、なぜ彼女が以前の制服を着続けているのか……謎だった。それが許されているのも、なにか釈然としない。

その一方で、泥水アリスが、いまだに中学時代の制服を着続けているのには正当な理由があった。

うちの高校で「その理由」を知らない者はいないと思う。
だからこそ、ロリ水さんは中学時代のセーラー服の着用を許されているのだった。

実をいうと、泥水アリスの家は「超」がつくほどの貧乏家庭なのだ。

どれくらいの「超」貧乏家庭かといえば――高校入学当時、驚くべきことに、泥水さんとその弟妹たちには、住居がなかった。

そして、いま現在――泥水アリスは、我が校の屋上に住んでいた。

超能力者といえどもマリみて４期は嬉しいお（　＾ω＾）

うちの高校――私立マミムメモ高校の屋上には、１軒のプレハブ小屋があった。ちなみにプレハブとは、部品を組み立てるようにして短期間で建築できる簡易工法の事だ。

造りは簡素そのもので、屋根はペラペラのトタン屋根であり、雨が降れば「ボタボタ」と音が鳴る。広さは１０畳ほどで、いちおうキッチンとトイレは備わっている。つまり、水道とガスと電気が通っていた。

そんな貧相な簡易住宅で、泥水アリスとその弟妹たちは生活していた。

もちろん経緯がある。

泥水さんは、高校入学選抜試験で１番の成績をおさめていた。それを受けて、うちの高校――私立マミムメモ高校の奨学制度に基づき、泥水さんは３年間の学費を全額免除された。その当時、家庭の事情とやらで泥水さんとその弟妹たちには住む場所がなかった。噂では、ご両親が失踪し、そのうえ元いたアパートを追い出されたらしい。

とにかく、成績優秀な泥水さんは、そのような理由から、うちの高校の屋上に住んでいた。

毎週、金曜日の夕飯は《カレーライス》と決まっているようで、金曜の放課後になると食欲をそそるいい匂いが校庭にまで漂ってくる。それくらいに屋上のプレハブ小屋は、ボクたちの学校生活の一部と化していた。

――もう息が続かないので、ふたたび時間を動かさなくてはならない。

ボクの席の周りには、依然として文房具や教科書やウ●コやらが宙に浮いたまま停止している。テスト中なので絶対に席に戻らなくてはならず、ボクはとりあえず机の下にもぐりこんで、それら飛び道具から身を守ることにした。

超能力者といえども腐った羊水はお断りだお（　＾ω＾）

机の下に隠れたボクは、ふたたび呼吸を再開する。
すると何事もなかったように時間は動きだし、教科書やウ●コがボクの頭上で乱れ飛びはじめた。

「――やめなさい！　これは命令よ！！」

通りのいい美声がクラス内に響き渡ると、クラス男子たちの手が一斉に止まる。
その声は、山川可南子が発したものだった。

「ちっ…楽しいピョロ助イジメも、今日で終わりか」
「まあ、可南子さまの命令なら仕方ないけどな」
「可南子さまに免じて、今日のところは勘弁してやろうぜ」

「そうよ、みんなお願い！　ピョロ助くんをイジメないで……」

つづけて、泥水アリスが小さな声を震わせながら、クラス中に男子に向かって懇願してくれた。

「うーん、アリスちゃんがそう言うなら自重せざるを得ないか」
「そうだな。嫌われたくないしな」
「すこし涙目になってるアリスちゃん萌え～」

こうしてボクは、どうにかウ●コまみれの危機を乗り切ることができた。山川可南子と泥水アリスに助けられた形だ。

「せいぜい感謝しなさいよね！」

山川可南子が得意気に言ってみせた……っていうか、そもそもボクをカンニング呼ばわりしたのはアナタだったような気がするんですが？

「……あ、あの。大丈夫？　ケガとかしてない？」

さっそく泥水さんが、ボクに手を差し伸べてくれた。顔を真っ赤にしながら、勇気をだしてボクを救ってくれたのだ。

まさに身長１３０センチの天使！　慈愛にみちた幼女！

「う、うん――あ！　そこに落ちてるウ●コ踏まないように気をつけないと！」

「あ、そ、そうだね……」

幸いなことに、そのウ●コは全然くさくなかった。無臭ニンニクみたいなものだろうか。

「ねえ、泥水さん」

「え！？　な、なにピョロ助くん」

「その、なんていうか――今日から泥水さんのこと『アリス』って呼んでもいいかな？」

「い、いいよ……わたし、その方が嬉しいかも」

人生って何があるかわからない。

こうして、ボクと泥水アリスは付き合うことになった。

「――じゃあ、わたしのことは『可南子タン』って呼べよな！　おい、わかったかピョロ助！」

「え！？」

「あと、わたしとも付き合え……っていうか隷属しろ」
「い、いえ、別に結構です……」
「今ならもれなく、わたしの運動靴にキスさせてやるよ。ありがたく思え」

ええと、そのう……。

「ほら！　さっさと読者の皆さんに説明しろよ！」

えー、おほん。
というわけで、ボクと山川可南子――可南子タンも付き合うことになりました。
やったー。うれしいなー。わーい、わーい（棒読み）

超能力者といえども台風一家だと思ってたお（　＾ω＾）

歴史のテストも終わり、今日はこれで放課後ということになった。
うちの学校のテストは、１日２〜３科目のペースで行われる。

「なんだよ、この有様は……」

教室に入るなり、担任の茶山先生が呆れた声をあげる。
自分の受け持ちのクラスの床に、教科書や紙クズやウ●コが散乱していたのだから驚くのも無理はない。

「全部、ピョロ助の仕業です」

「そうそう」

「間違いありません刑事さん、あの男が犯人です！」

予想通りの展開だったので、そろそろボクも慣れてきた。

「なるほど、だいたい事情はわかった……それじゃあ、ピョロ助。罰として、貴様ひとりで全部キレイに片付けろ。いいな？」

即決だった。独裁国家の裁判も、たぶんこんな感じなのだと思う。

「ええと……わかりました。掃除しておきます」

このさい弁解するのも面倒なので、ボクは素直に引き受けることにした。
まあいい。掃除を押し付けられた腹いせに、みんなの机とかロッ

カーにイタズラしたりするもんね。そうだ、女子ロッカーの中が見放題じゃないか！　やったね、これはソフトバンク携帯よりもお得だぞ！

「――と、ピョロ助が心の中で申しております、先生」

絶妙なタイミングでチクったのは、おなじみ山川可南子だった。しまった、忘れていた。

「ウ、ウソですよ先生！　ボクはそんなこと思ってませんから！！」

「けしからん奴だな…まあ気持ちはわからないでもないが――と、とにかく変態行為だけは慎むように。ほら、さっさと掃除をはじめないか！」

「……わたしも手伝うから」

そうだった。ボクには心優しい幼女（１６）がついているのだ。なにも恐れることはない。

こうして、アリスとボクは、互いに協力しながら2人だけで教室の掃除をおこなった。

「……ふぅ。やっと終わった」

「ご苦労さま――ね、ねえ。ピョロ助くん」

さんざん雑巾をしぼっていた後なので、アリスの手は赤くかじかんでいる。

「ん、どうかした？」

身長１３０センチの女の子が、モジモジと何かを言いにくそうにしていた。いますぐ時間を停めて抱きしめちゃおうかとも思ったけど、どうにかして我慢する。

「あのね……もしよかったら、うちでお昼ごはんでもどうかと思って……」

「え！？　いいの？　アリスの家に行ってもいいの？」

「うん。ちょうど今日はお父さんもお母さんもいないし――っていうか、１年以上も前から両親はいないけどね。えへへ…」

どうやらアリスは冗談を言ってみせたのだ。あまりにも悲しいジョークだった。もちろん、ボクとしては大歓迎だけど。

「アリスの家が学校の屋上にあるってことは知ってたけど、そこへ訪れる日が来ようとは思ってもみなかったよ」

「うん。わたしも…その…ピョロ助君とお付き合いできるなんて思ってもみなかった……」

ええと、まあ、こんな毒にも薬にもならない会話はご迷惑でしょうから、さっさと次のシーンに移りますね――あはは、すみませんねえ。ボクたち思春期なもので。

超能力者といえどもフリーザ様には勝てぬお（　＾ω＾）

アリスの家は、うちの高校の屋上にある。入学試験トップの成績を認められたアリスは、１軒のプレハブ小屋と学費免除という特典を与えられたのだった。

「屋上なんて初めて来たよ」

ひたすら階段を上り続けたあと、ボクとアリスは屋上にたどりついた。

これからアリスの家で昼食をご馳走になるのだ。

「普通は来ないよね、屋上なんて……あ、でもＵＦＯ同好会の人は、よく来てるみたい」

アリスの言うとおり、屋上のコンクリート床のあちこちには白線で奇妙な文様が描かれていた。部員数３名で構成される《ＵＦＯ同好会》は、うちの学校でも有名な怪しい集まりだった。

「ＵＦＯなんて降りて来ないと思うけど、いちおう気をつけた方がいいよ。弟さんや妹さんもいるんだし」

「フフ……ピョロ助くん、おもしろい」

あのう、ボクとしてはいちおう真面目に注意を促したつもりなのですけど――あのね、宇宙人を甘くみちゃいけないよ、アリス。たとえば、フリーザ様なんて戦闘力５０万もあるんだよ！　会ったら１秒で殺されるよ！

「じゃあ、どうぞ入って。汚いところで、ごめんね」

「とんでもない。では、おじゃましまーす」

薄っぺらい造りのドアを開けると、すぐに狭い玄関があった。小さな靴が1足ずつ、きちんと揃えて並べられていた。ご両親がいないぶん、アリスが厳しくしつけているのだと思う。なんだか泣けてくる。

「――おかえり、おねえちゃん！」

最初に出てきたのは小さな女の子で、当然ながらアリスにも増してロリで幼女だった。妹と言っても、まだ小学3年生くらいの子だ。アリスは高2なのだから、ずいぶんと年齢が離れている。

「ぼく、おなかすいたよ～……あっ」

もう1人は男の子で、どうやら泥水家の末っ子のようだ。まだ小学1～2年生くらいなのだろうか、ボクの姿を発見すると、サッと小さなお姉さんの後ろに隠れてしまった。

「ねえ？　そのひとって誰？」

アリスの妹は、初対面だというのに物怖じすることなく、ボクを指さして聞いた。

「お姉ちゃんの…その…ええと…お、お友達よ！」

「どうも、こんにちわ。お友達です」

自己紹介もそこそこにして、ボクと愉快な弟妹たちは、1部屋っきりの8畳間にあるテーブルを囲みながら、アリスのつくる昼食を心待ちにすることとなった。

超能力者といえどもカレーで顔は洗えないお（　＾ω＾）

アリスの住んでいるプレハブ小屋は、本当に狭かった。キッチンとユニットバス、そして8畳間――たったこれだけしかない家なのだ。かろうじて押入れはあるものの、たくさん入らないようで部屋の隅には3人分の布団が積み上げてあった。

「おまたせ～。熱いから気をつけてね～」

お盆に乗せて運ばれてきたのはラーメンの丼だった。モクモクと湯気を立てているスープの上には《1／2のゆで玉子》や《ホウレンソウ》などがトッピングされていて美味しそうだった。

「ラーメン！　ラーメン！！」

アリスの弟――泥水セシルが無邪気な声をあげて喜んでいる。すこし慣れてきたのか、昼食の出来上がりを待っているあいだに、セシルとボクはすこし打ち解けることができていた。

「あっ…こら、セシル！　お客さまが先よ！」

「ええと…いいよ、ボクのは後で」

「――あのね、おねえちゃんのつくるラーメンって、すっごくおいしいんだよ！」

隣に座っているアリスの妹――泥水リリスが、ボクの顔をのぞきこみながら言う。器量のいいところがアリスそっくりで、黒髪のツインテールがチャームポイントだ。

「なんでおいしいかっていうとね、おねえちゃんはラーメンやさんなんだよ！」

「ちょ、ちょっとリリス！　余計なことを言うのはやめなさい」

アリスが…ラーメン屋さん？　まあ、言わんとしていることは何となくわかった。

「あ、あのね…わたし、掛け持ちでアルバイトしてるんだけど、そのなかにラーメン屋さんもあるんだ」

つまりは、そういうことだ。掛け持ちのアルバイト――いくら学費が免除されているといっても、生活費までは支給されていないはずだ。ご両親がいない泥水家の家計を支えるのは、当然、いちばん年上のアリスの役割になってしまう。

「あ、あのね――ラーメン屋で働いているっていっても、わたしがラーメン作ってるわけじゃないよ……皿洗いとか注文聞いたりとかする程度だし」

「……そうだとしても…うん……美味しいよ、このラーメン。インスタントのやつじゃない感じだね？」

お世辞じゃなくて、本当にアリスが作ったラーメンは美味しかった。特に、麺がシコシコ（笑）していた。

「うん。お店で使ってる本格的な生麺だから、わたしなんかが作っても美味しく出来るんだ……スープも、うちのお店のだよ」

よほどお気に入りなのか、リリスや弟のセシルたちは一心不乱にラーメンを食べ続けている。

「ねえ、アリス……」

「ん？　ピョロ助くん、どうしたの？」

すっかりボクの名前は「ピョロ助」になっている。本名は違いますから。まあ、そんなことはいい。

「あの…こんなこと聞いちゃダメなのかもしれないけど――なんで、ご両親と一緒に暮らしてないの？」

高校2年生の女の子が、小学生2人を抱えての3人暮らし。子供だけの生活。アルバイトの掛け持ち――どう考えたって普通じゃなかった。

「あ……そっか…そうだよね。気になるよね」

さっきまで笑顔だったアリスは、表情をくもらせて下を向く。

「気にさわったらゴメン――でも、聞かないっていうのも不自然だと思うから……」

ボクにとって泥水アリスという女の子は（まだニャンニャンしてないけれど）すでに他人ではなかった。当然、リリスやセシルもだ。

ボクは思う――いまのアリスたちは、誰がどう考えても幸せには見えない。

きっとアリスは、高校の授業を終えたあとに、おそらく毎日アルバイトをしているのだろう。３人分の生活費を稼ぐためには夜遅くまで働かなければならないはずで、バイトから帰って来た後も、リリスやセシルの面倒を見なければならないだろうし、遊ぶ時間なんてあるはずがない。これは――とても残酷な悲劇だった。

「もし迷惑じゃなかったら…ボクに話してほしい。なぜ、子供が３人だけで、こんなプレハブ小屋に住まなければならなくなったの？」

そういい終えたあと、ボクはラーメン丼を見下ろす。最後に食べようと思って残しておいた《ゆで玉子》が、いつのまにか無くなっていた――まあ、そんなことはいい。

「……うん。わかった…いいよ――でもね、別にそんな大したことじゃないんだよ」

言葉とは裏腹に、アリスは意を決したように強い眼差しをボクに向ける。

「あのね――わたしたち、お母さんの顔を知らないんだよね」

「あ…う……そうなんだ」

これは本格的に聞いちゃいけないことを聞いてしまったような気がする。幼いセシルが同席している時にしていい話じゃない。

「わたし、おねえちゃんがいれば、ぜんぜんへーきだよ！」

「……ぼ…ぼくも！」

まだ小学校の低学年だというのに、リリスとセシルには充分なくらい《思いやりの心》が備わっているようだった。それだけで、アリスの高潔で慈悲深い人柄が伝わってくる。どうやらボクは、素晴らしい女性に愛されてしまったらしい。

「あとね……お父さんは…ええと、まあ生きてはいるんだけど、そのう――」

「も、もし言いにくい事なら、無理に教えてくれなくてもいいよ……何かとてもつもない真実が潜んでいそうで、ちょっとイヤな予感もするし――」

「――ち、違うの！　そういうんじゃなくって……えっとね。あのね、わたし達のお父さんは、ずっと長い間、ある研究をし続けているんだけどね……」

「ふうん。じゃあ大学の先生か何かなの？」

「そうじゃなくって…わたしが小さい頃までは平凡なサラリーマンだったの」

「へえ…そうなんだ」

明らかに、アリスの顔を紅潮している。ほんのり赤い。

「でもね、わたしが中学3年生の時に、ある日突然なにかに目覚めたらしくって…それまでやっていた会社の仕事を辞めて、その研究に没頭しはじめたの」

「研究って…どんな研究？」

死者を蘇らせる研究とかだったら…どうしようか。もしそうなら、ボクはこの場を全力疾走で脱出しなければならない。

「わたしのお父さんがしている研究っていうのはね――」

「う、うん……」

「チロルチョコを金塊に変える研究なの」

超能力者といえども祝スレイヤーズ４期だお（　＾ω＾）

アリスの父親は生きているらしい。
じゃあなぜ一緒に暮らしていないのかとボクが聞いたら、驚きの答えが返ってきた。

チロルチョコを金塊に変える研究。

どうやら、その奇妙な研究に没頭するために、アリス達を置いてどこかへ行ってしまったというのだ。

「――で、アリスのお父さんは今どこにいるの？」

「それは…わからないの。わたしが中学3年生の時に、ある日突然どこかへ行っちゃって以来、何の連絡もないよ」

両親不在の子供だけの生活――という涙無しには語れない事情が、一転しておかしなものになってきた。

「チロルチョコって……あの１０円で売ってる小さなチョコレート菓子の事だよね？」

確認するまでもないけど、いちおう聞いてみる。

「え？　う、うん。そうだけど」

「化学とかそういう詳しいことは知らないけど…常識的に考えて、チョコレートが金に変化することって、あのう、そのう――ほぼ絶対に有り得ないと思うんだけど…」

金でないものを金に変える研究――それは錬金術と言われるものだということは、ボクでも知っている。そんなことは不可能である、ということをだ。詳しくはＷｉｋｉｐｅｄｉａに書いてあるので各自で調べてください。

「そうよね…普通、信じられないよね…。チロルチョコを金に変えるなんて事――」

アリスは、半ばあきらめたような微笑みを僕に向ける。

「こんなこと言っちゃあ悪いけど……アリスのお父さんは頭がおかしいんだと思うよ。」

ちょっとハッキリ言いすぎたかもしれない。

「――おとうさんを、ばかにするな！」

案の定、突然、末っ子のセシルが飛びかかってきた。

「ご、ごめん！…い、言いすぎたよ！」

「殺してやる！殺してやる！殺してやる！」

「こ、こら！　セシル、やめなさい！？」

いまにも僕の頚動脈を噛み切ろうとするセシル少年のことをアリスやリリスが引き離そうとして、泥水家の茶の間は少しのあいだ騒然となった。

そうそう。２ヶ月以上も更新しなくて…ほんと、すんませんでした。

超能力者といえどもパジャマがスク水だお（　＾ω＾）

末っ子のセシルに、あやうく頚動脈を噛み切られそうになったボクは――そのあと、およそ７４回ほど土下座を繰り返すことで、なんとか許してもらうことができた。

「そうだよね…。チロルチョコを金塊に変えるなんて…ふつう信じられないよね……」

「…ということは、アリスは信じてるってこと？」

「うん…。お父さんの話は本当だと思う」

これは――悲劇だ。

「チロルチョコを金塊に変える」という馬鹿げた妄想を実現するために、幼い子供たちを置いて家を飛び出していった父親。

そんなどうしようもない人間を、実の父親だという理由で信じ、ひたすら帰りを待ちつづける幼いリリスとセシル。

生活費を稼ぐために、毎日クタクタになるまでアルバイトにあけくれるアリス。

――これが悲劇以外のなんだというのか。

「ま、まあ…。アリスが信じてるっていうなら――他人のボクがとやかく言う資格なんてないよ……」

どうすることもできないという無力感にさいなまれながら、ボクはなるべく言葉を選んでアリスに告げる。

でも…本当にそれでいいのだろうか？

たとえセシルに頚動脈を噛み切られてでも、しつこく説得し続けるべきではないのか？

……いや、それは困る。頚動脈を噛み切られたら死んでしまう。死ぬのは、困る。

「あ…そうだ。ピョロ助くん。ちょっと待ってて……」

そう言って、唐突にアリスが立ち上がる。

「食後のデザートなら、お構いなく」

「ち、違うよ――。ちょっと待っててね…」

「……ずうずうしいやつだな」

「セシル！　お客様に失礼でしょ。」

また飛びかかって来そうな眼でセシルに睨まれること1分間。

すぐにアリスが戻ってきた。

その手には――チロルチョコが1個。

「そ、それは…食後のデザート？」

「――絶対、クラスのみんなには言わないでね」

みんなには言うな…？　いったいどういう意味だろう――そうか！　ひと足早い、バレンタインチョコってことか！！

「えへへ…なんか照れるなあ～。でも、もうボクたちは付き合ってるんだから、べつにみんなに内緒にしなくても――」

「そうじゃないんだけど…。まあ、とりあえず受け取ってください。」

「あはは…なんか照れるなあ～。」

「ばっかじゃねーの！　いいから、さっさとうけとれよ！！」

モジモジしているボクに業を煮やしたのか、セシルが突然立ち上る。そして、姉のアリスからチロルチョコを奪い取ると――それをボクに向かって投げつけた。

「うわっ…！」

その瞬間、ボクは反射的に「時間」を止めた。

セシルが投げつけたチロルチョコは、ボクの顔のすぐそばで静止していた。なんという正確なコントロール…などと感心している場合ではない。

「さて、どないしよ」

ちょっとニセ関西弁を使ってみた…まあ、そんなことはどうでもいいとして、ボクは迫り来るチロルチョコを回避しなければならな

い。

たかがチロルチョコ。

されどチロルチョコ。

顔面に直撃すれば、ちょっとくらいは痛いだろう。

「でもなあ…」

ここで華麗にチロルチョコをかわして見せようものなら、セシルの機嫌が悪くなるに違いなかった。今後、アリスとの肉欲の…じゃなくって、健全な男女交際を続けていきたいのならば、その弟であるセシルとも友好な関係を築いておきたいところだ。

「……」

うん。そうしよう。

ここはあえて、セシルが投げたチロルチョコをかわさない方向でいくことにする。

セシルの投げたチロルチョコをあえて顔面で受け止めることで、ボクの度量の大きさを見せつけてやるのだ。なんか、そんなマンガを読んだ気がする。

なあに…。相手は、たかだか１０グラム程度のチロルチョコ。顔面に当たれば痛いだろうが、出血したり頭蓋骨にヒビが入るなんてことは絶対にあるまい。ちょっと我慢すればいいだけだ。来たるべきアリスとの肉欲…あ、違いますちがいます…健全な男女交際の日々を楽しむための試練だと思えばいいのだ。

「よし」

そんなわけで。

ボクは、目の前で静止しているチロルチョコを「正々堂々」と「顔面」で受け止めることに決めたのだった。

超能力者といえども修学旅行は近所の公園だお（　＾ω＾）

……なにかプニプニしたものが、ボクのほっぺに当たっている。

それは温かくて、思わず手でモミモミしたくなるような心地よさだった。

……気持ちいい。こんなに気持ちのいいものが、この世にあったなんて。

「おい！　起きろよ！」

そんな乱暴な声とともに、ボクはこめかみの辺りに衝撃を感じた。

「あ、痛ッ！！！」

驚いて飛び起きると……ボクは走行中の車の中にいて、すぐそばには山川可南子が座っていた。

「…！？　どうして？」

「あはは！　どうしても何も――おまえのことを誘拐したんだよ！」

誘拐…なんという物騒な言葉を使う女だろうか。

あれ？　でもたしか、ボクは泥水アリスの家にいたはずだ。

昼食にラーメンをご馳走になって…チロルチョコを金塊に変える研究をしているという頭のおかしくなったアリス父の話を聞いて…そ

うだ！　食後のデザートにどうぞって、アリスがボクにチロルチョコを渡そうとしたところを弟のセシルがそれを放り投げて…それをボクは顔面で受け止めることにして――あれ？　それからどうなったんだっけ？　まったく記憶がなかった。

「は、犯罪だ！　誘拐は立派な犯罪なんだぞ！！」

「……。」

ボクが激しい口調で責めたてると――山川可南子は、口をつぐんで喋らなくなった。
喋らなくなったどころか…目に涙をためはじめていた。

「あーっ！　ウソ泣きだろ、どうせウソ泣きなんだろ！　そんなものに騙されないぞ！」

「……。」

ボクが騒げば騒ぐほど、ますます山川可南子は黙りこむ。しかも、その悲しげな表情は、ぜんぜん可愛くないので見ていて退屈だった。不愉快ですらある。元の作りが良くないので当たり前なんだけど。

「…ひどい。……ピョロ助くん、ひどいよ。いくらわたしがブスだからって…ひどいよ」

「あっ！？　またボクの心を読んだな！　くそっ、人権侵害だぞ！！」

「…だって、しょうがないじゃない。わたしだって…望んで人の心の声を聴いてるわけじゃないのに。」

…そうだったのか。
…知らなかった。

「あ…うぅ。ま、まあ、そういう事情があるのなら仕方ないけど――。」

「ねえ、ピョロ助くん？　わたしって…そんなにブスなの？　生きてちゃダメなくらいのブスなの？」

「ま、まあ…その…生きてちゃダメってほどでもないけど…。」

「え！？　それってカワイイって事？　わたし、カワイイって事なの？　っていうか、わたしカワイイよね？　むしろ、逆にカワイイみたいな？」

――意味がわからない。

ボクと山川可南子を乗せた車は、なおもどこかへ向かって走っているようだった。

超能力者といえども指3本は無理だお（　＾ω＾）

アリスの家で昼食をご馳走になっていたはずのボクは、いつの間にか気を失ったらしく、次に目覚めたときにはなぜか山川可南子がそばにいた。そして、どうやらここは走行中の車内であり、一体どこへ向かって走っているのだろうか…。

「…で。なんでボクの事を誘拐したわけ？　身代金目的なの？――って、たしか山川さんの家は資産家のはずだから、そんなことする意味がないような…」

「そんなヨソヨソしい呼び方しないでっ！　可南子タン…って呼ぶって約束でしょ？」

「え！？　…じ、じゃあ、ええと…可南子タン？」

「なーに？　ピョロ助くん」

「…可南子タンは、なんでボクのことを誘拐したの？」

「ウフフ…。それはね――」

「うん…。それは？」

「――ピョロ助くんを…わたし好みに調教するためよ」

ち、調教！？　そ、それは一体どういう風に…。

「まずは…あの穴に、指3本くらい入るようにするところから――

って冗談よ…ウフフッ」

いや、ウフフッじゃないですって！……あの穴って何さ！？

「ピョロ助くんは…泥水アリスちゃんの家にいたのは覚えてるでしょ？」

「う…うん。お昼に手作りラーメンをご馳走してもらったんだ。美味しかったよ。」

そして、食後のデザートにチロルチョコを饗されたことまでは覚えている。でも…そのあとがよく思い出せなかった。

「思い出せないのは当たり前だよ。…ピョロ助くんは気絶したんだから」

「え！？　気絶？　なんでボクが？」

「さあ？　それはよく知らないけど。でも…わたしがピョロ助くんの制服に仕掛けた盗聴器ごしに聞いてた感じだと…なんか「ゴツン」って音してたわね。たぶん…机の角にでも頭をぶつけたんじゃないの？」

そうだったのか…って、あれ？…盗聴器って？

超能力者といえどもエヴァ新劇場版買ったお（　＾ω＾）

ボクや泥水姉弟たちの会話は、山川可南子に聞かれていた――盗聴器という手段によって。

「ボクの制服に盗聴器を仕掛けたって…。一体どこに？　っていうかいつの間に…。」

「どこに仕掛けたか、なんて言っちゃったら、盗聴器の意味ないでしょ。だから…教えなーい」

まあそう言うだろうと思った…。

――近距離では心を読まれ、遠距離では盗聴器によって独り言まで筒抜け。ホント、厄介な相手に――おっと。いけない、いけない。…カワイイなー。可南子タンは超カワイイなー。（棒読み）

「…あ。もうすぐ着くわね。」

車窓の外を眺めながら、山川可南子がつぶやく。

「ねえ、可南子タン…。ボクは一体どこへ連れ去られようとしてるの？　いいかげん教えてくれても…」

「どこって――わたしの家に向かってるのよ。」

なんだ…普通だな。ボクを誘拐したっていうから、てっきり山奥のさびれた廃屋の地下室にでも監禁されるのかと思っていた。

「ピョロ助くんのこと――わたしのお父さんに紹介しようと思って」

「え！？」

「わたしたち――結婚するんだよ」

とんでもないことをサラリと言う。

結婚――それは人生の墓場鬼太郎。っていうか、ボクはまだ高校生だ。

それに、山川可南子みたいなブｓ…じゃなかった、まだそんなにお互いのことを知らないのに結婚なんてできるはずがなかった。

「け、結婚って……つまりは、のび太としずかちゃんが将来おこなう戸籍記載の変更をともなう社会的契約のこと？」

ボクは戸惑うあまり、わけのわからない例えを持ち出してしまう。

「うん、そうだよ。当然のだけど、婿養子に来てもらうから。つまり、結婚したら『山川ピョロ助』になるってことよ」

超能力者といえども展開させるのが苦しいお（　＾ω＾）

このままでは、ボクは高校1年生にしてムリヤリ既婚者にされてしまう。しかも、宮崎あおい（２３）とか蒼井優（２３）とかならともかく、容姿がムニャムニャな山川可南子（１６）なんかとムリヤリ結婚しなきゃならないなんて…。こんな女と結婚するくらいなら、まだ岩下志麻　（６７）や森光子（８８）と強制的に結婚させられたほうがまだマシだった。

「ヒドイよ…ピョロ助くん。いくらわたしの顔が倖田來未（２５）に似てるからって…そんな言い方ないよ！　あの「羊水が腐ってる発言」をしたのは倖田來未（２５）であって、わたしじゃないのに――わたしのことを責めるのはヒドイよ！！」

また人の心をスキャニングしやがった…。ほらね。こんな厄介な女と結婚したら苦労するに決まっている。あー助けてー！　福田首相（７２）、助けてー！　小泉元首相（６６）、助けてー！！

というわけで、ボクは逃亡することに決めた。

「……ッ！」

ボクが呼吸を停めれば、この世の全てが停止する。

みなさん覚えていましたか？

ボクが時間停止能力者だということを。

（……さて、どうやって逃げようか）

窓の外の風景もピタリと停まっている。当然のごとく、いまボクが監禁されている高級乗用車のエンジン音も聞こえない。目の前にいる山川可南子も、この車を運転している運転手も、髪の先ひとつ動かせない状態なのだ。

（とりあえず、外に出よう…）

ボクは後部座席の扉のロックを解除し、扉のハンドルに手をかけた。

……ガチャリ。

開いた。これで外へ脱出することができる。

（……！？　いや、ちょっと待てよ…）

もし万が一、ボクが自動車から外へと足を踏み降ろした瞬間――何かの間違いで、再び時間が動きはじめたとしたら…どうなる？

ちょっと考えてみる…。

自動車の外へ足を踏み出した瞬間、ふたたび時間が動きはじめたら――おそらく、地面に降ろした右足なり左足ではバランスを保てなくなり、ボクは勢いよく放り出され車体の下に巻き込まれる可能性が高い。そうなれば迫り来る後部車輪によって、ボクはおよそ０・３秒くらいで「ガリッ、グチャッ」というふうに、頭部もしくはその他の身体の一部分をいちじるしく損傷するに違いなかった。

「いやだーッ！　人間ミンチはいやだーっ！　ハンバーグになんかなりたくないよう！」

思わずそう叫んだ瞬間、ふたたび時間が動きはじめた。

――結局。

ボクは逃げることも出来ないまま、山川可南子の屋敷に拉致されることになった。

超能力者といえども全く先の展開が見えぬお（　＾ω＾）

ようやく、ボクと可南子タンを乗せた車がエンジン音を鳴らすのをやめた。完全に停車したということは、ここが「ゴール」ということなのだろう。

「着いたわよ、ピョロ助くん」

運転手が、素早く車を降りて山川可南子のいる側のドアを開ける。

「う、うん…」

おそるおそる車を降りて、ボクは砂利が敷かれているの地面の上に降り立つ。周囲はスギなどの背の高い雑木林に囲まれていて――どうやら、ここは奥深い山の中のようだった。

「…これが、可南子タンの家？」

「違うわ。別荘よ」

さすが資産家なだけのことはある。それにしても…。別荘のくせに、ボクの家よりも大きかった――畜生！　謝れ！　３５年ローンを組んでやっと２ＬＤＫの小さな一戸建てを持つことができたボクの父さんに謝れ！　パート勤めの母さんに謝れ！

「お嬢様…。旦那様がお待ちですので…。」

それは若々しい女性の声だった。なるほど、運転手は女の人だったのか。身長がボクよりも高い上に、男物の黒いスーツを着ていた

ので気づかなかった。外見は細身だけど、背は１８０ｃｍ以上はありそうだ。つば付き帽を目深にかぶっているので――顔はよく見えなかった。

「そうだったわね…。ピョロ助くん、いそいでお父様の書斎に行きましょ」

「ち、ちょっと待ってよ！？　なんでボクが可南子タンのお父さんに会わなきゃいけないのさ？」

「理由はさっき言ったはずよ。…わたしとピョロ助くんは結婚するの。だから、その挨拶のためよ。」

「いや…。だから、なんでボクが可南子タンと結婚しなくちゃ――」

ボクが抗弁しようとした瞬間――。

そばにいた女性運転手が、ものすごい勢いで襲いかかってきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4713d/

時間停止能力者のためのリスクマネジメント入門

2010年10月28日04時37分発行